保育あきた瓦版

第５２号　平成２９年　１２月　１４日　　秋田県保育協議会　広報委員会

行　く　年　来　る　年

秋田県保育協議会会長　　川嶋　眞諒

気が付けば涼しかった秋も深まり、日に日に寒さが増してきて冬の準備も着々と進められ、ついこの間までたやすく落ちた木の葉も、来るべき風雪に備えて茎や葉の厚さを調えて雨にも負けず、風にも負けずという計らいもなく、可もなく不可もなく、雨風をうけ境内地に根を下ろしております。

この自然の計らいのない用意周到さに頭が下がるばかりです。雨音の中の木々のそれぞれの調身を見つめていると、自然と背筋が伸び「木々と呼吸を合わせられないものか」と、丁寧に呼吸する小さな御縁を大切にしていきたいものです。

平成２９年もあとわずかで終わろうとしております。若い時は新年のくる年に期待が大きかったのですが、歳のせいか最近は行く年を惜しむ気持ちが強くなってきたような気が致します。然し、いくら惜しんでも時は無情に過ぎて行きます。そして今年も又、一年最後の日大晦日を迎えます。

大晦日の夜半から元旦にかけて、日本全国各地の寺院で除夜の梵鐘が鳴り響きわたります。人間の持つ百八の煩悩を取り除くために百八回鐘をつくのが古来よりの慣わしでありますが、百八の梵鐘をつくのに一時間以上かかります。

さて、この煩悩とは欲望や怒りと言った我々の心と体を悩ませ、正しい判断の邪魔をする心の動きを言います。又、ストレスなども現代の煩悩のひとつであると言えます。

人類は大昔から数々の煩悩と対自してきました。その中には解決不可能な問題も多々あります。たとえいくらかの悩みは解決できたとしても、また新たな問題が煩悩やストレスとして我々を襲い続けることでしょう。悩みのために悩むことはやめて、解決できない問題もあることを自覚し必要以上に考えない、思い悩まないことが大切ではないでしょうか。

今年も国内外でいろんな出来事がたくさんありました。嫌なことは今日限り忘れ、良かったことはこれからも多くなることを期待しつつ訪れる新年が、皆様にとりまして煩悩や悩みの少ない希望に満ちた素晴らしい一年になりますよう心より御祈念申し上げます。

保育士等のキャリアアップ研修に伴う現状や課題等について

秋田県教育庁幼保推進課指導班

副主幹（兼）班長

北條　保

皆様も御存知のとおり、平成 27 年には教育・保育における量と質を支える「子ども・子育て支援新制度」がスタートしました。保育の質の担保には、行政の支援に加え、保育士の力量の確保が不可欠です。子ども一人一人へのきめ細やかな対応、多様なニーズに応じた子育て支援等、多岐にわたる専門性が求められます。しかし、それを保障する保育士への研修の機会提供においては、以下の課題が見られます。

・キャリアに応じた体系的な研修機会の提供、全ての施設の保育士が研修を受ける制度的な環境を一層進める必要があります。
・保育士の研修履歴を管理するシステムの構築が必要です。

こうした現状を踏まえ、国ではこの４月に「保育士等キャリアアップ研修ガイドライン」を示し、処遇改善加算するための仕組みを明らかにし、保育士が誇りとやりがいをもって働き続けることができる仕組みをスタートさせました。
実施に当たっては、各研修には３日間程度を要すること、遠隔地からの参加等、受講者の負担増が見込まれます。そこで、県では皆様の負担軽減を図るため、平成 29 年 10 月 17 日に「平成 29 年度保育士等キャリアアップ研修の指定について」で以下の点を示しました。
①県が実施した過去５年間の研修で、ガイドラインに合致するものをキャリアアップ研修と同等と位置付けます（この場合、研修時にレポートを提出いただいており、ガイドラインが求められているレポートを別に提出する必要はありません）。
②研修実施機関として、県以外に秋田県保育協議会及び該当する研修を実施している市町村を指名しました。受講者の皆さんが認定された平成 29 年度の研修に参加した場合、レポートをそれぞれの研修の主催者に提出してください。
③①及び②の受講履歴は県が管理し、平成 30 年２月末頃に、各園を通して「キャリアアップ研修受講管理表」を提出していただいた方々に、受講履歴をお送りする予定です。

今年度の処遇改善には研修が要件として課されるものではありません。しかし、国では各県の受講状況に応じて、いずれ要件が課されるものと思います。どうか、計画的な研修の受講を進めてほしいものです。

全国保育研究大会報告

秋田県保育協議会　研修委員会
委員長　白瀬　真紀子

平成 29 年 11 月 15 日から 3 日間に渡り兵庫県神戸市において、第 61 回目の全国保育研究大会が開催されました。

ベル演奏グループ「ティンカーベル」によるミュージックベルとトーンチャイムの２つの楽器を使った癒しのベル演奏で開幕しました。会場内に響き渡る素晴らしい演奏に、日々の喧噪から安らぎの世界に身を任せてうっとりしました。開会式後、厚生労働省 唐沢裕之氏による行政説明、全国保育研究大会会長 万田康氏による基調報告と続き、保育に関する現状と取組や各事業についての説明がありました。国では、待機児童の対策や保育の質の向上に向けて予算を計上し各種の事業を行っていますが、それが現場におりて浸透するには時間がかかることを感じました。

また、処遇改善や働き方改革等、現場として一番興味関心があることでは、全国保育協議会としても国に対して意見要望事項として意見を発出予定しています。現場に直結することを最優先にして働きかけて欲しいと切に希望したいところです。

２日目は１番のメインである分科会が行われました。秋田県からは、第１分科会に、潟上市の若竹幼児教育センターの研究発表と第１１分科会フリー発表で、なるせ保育園の研究発表がありました。２園は、県保育研究大会、北海道・東北ブロック保育研究大会を経て全国大会の発表で、更に磨きがかかり立派な発表でした。第１分科会では、助言者の阿部和子先生より、３０年度から改定される保育指針と併せて、養護と教育の一体化や学びについて助言がありました。中でも「教育」の主語は「大人」だが、「学び」の主語は「子ども」であるという言葉が印象に残りました。３歳未満児の教育が学びと表現されていることの意味として、教育と学びの間に養護的側面が関与することで学びが起きる可能性を大きくし、子どもの興味関心（欲求）を受け止めることが、教育（学び）の基盤である。というお話が心に残っています。

全国保育研究大会に参加し、各地の園長先生はじめ沢山の保育士の方々と意見交換することで、自分の保育を振り返ることができ、とても良い機会になりました。

全国保育研究大会　意見発表園として参加して

幼保携型認定こども園　潟上市立若竹幼児教育センター
主任保育教諭　田仲　真紀子

11 月 15 日から 3 日間の日程で、約 2000 人の参加者により、兵庫県神戸市で「第 61 回全国保育研究大会」が開催されました。当園は第 1 分科会の北海道・東北ブロック地区代表　意見発表園として参加させていただきました。

ここ東北、秋田の地から近畿地区神戸へと、大都会への出発です。久しく飛行機に縁遠かった私は、前々夜なかなか寝付けず・・・というのも、全国大会という大舞台での発表への不安が 4 割、残りの 6 割は無事に迷うことなく現地へたどり着けるかという不安でいっぱいになってしまったのです。今はスマートフォンさえあれば何でも検索でき、道案内もしてくれます。しかし、なにせアナログ世代の私にとって習慣になっている、ペンと紙を用意し何度も検索したルートや時間、場所などを事前に書き出すということをしたせいもあり、不安が増幅されたのかもしれません。出発前には、全職員からの「がんばってきてください」「気をつけていってらっしゃい」「大丈夫、スマホがあれば」などのエールをもらい、なんと心強かったことか。実際、いろいろな場面で職員一人一人の顔が浮かんできましたしスマホでの検索も大いに役立ち便利さを改めて痛感した次第です。

さて、朝早くに秋田を旅立ち、昼過ぎ無事に会場まで到着、分科会打ち合わせへ。会場にはすでに司会者の兵庫県姫路市の園長先生や全国保育協議会常任協議員大分県の園長先生、幹事の兵庫県加古川市の園長先生がおられ、指導助言の大妻女子大学教授阿部和子先生、そして埼玉県、宮崎県の意見発表者が集まりました。お国自慢や園の紹介などの話題もしながら、明日の本番を控え和やかな雰囲気で第 1 分科会当日の進め方を確認していきました。夕方の交流会は、約 700 人の参加となり盛大な会となりました。地酒コーナーが人気で、ステージでは元宝ジェンヌの歌とダンスや全国保育協議会の万田会長による素敵な歌等で盛り上がりました。（歌声が最高！）

そして翌日の意見発表当日、会場に 230 名という参加者が席を埋めていく様子を見ながら、いよいよという実感がじわりじわりと迫り、指先の冷たさを感じながらも、意見発表を一緒に進める伊藤と励まし合い、ついに時間に。集中して発表原稿に向かううちに心もいつしか静まり、時間が過ぎたという感じでした。あとは、質疑応答でのやりとりをして午前の部を終え、第 1 分科会の当事者で、昨今における保育業界の課題や地域性による特性などを話し合いながらの昼食会となりました。指導助言の先生からは「研究の意図や経緯、道筋がわかる」「研究を通して保育者自身が自己課題にきづきながら保育を振り返っている」「あくまでも乳幼児理解が保育の基本であり、カンファレンスをすることで視野を広げていくことは大切」等の高評価をいただきました。午後のグループ協議もスムーズに進みました。

3 日目の記念講演は、社会情勢を交えた保育士の心をつかむような内容をお笑いコントで繰り広げ、会場が笑いの渦となりました。

こうして 3 日間という貴重な時間をいただき、職場はもちろん家族にも感謝しています。また、あらためて『子どもの健やかな成長を支えるために』という同じ志をもった保育に従事する者がこうして一堂に会することで、自分のおかれた立場や園の実情を改めて感じプラスにとれる部分がたくさんあることと秋田の保育の質の高さを実感することができ、子どものためにという気持ちを新たにすることができました。

全国保育研究大会に出場して

東成瀬村立なるせ保育園
主任保育士　伊勢谷　則子

１１月１５～１７日に兵庫県神戸市で開催された「第６１回全国保育研究大会」に、意見発表者として出場しました。私の参加した第１１分科会フリー発表は、テーマが自由でしたので、県大会や北海道・東北ブロック大会に参加した時と同じく、『地域と連携する保育園経営のあり方』のテーマで発表しました。

発表者のトップバッターということもあり最初はとても緊張しましたが、方言を使用した職員の寸劇の動画では笑いが起きるなど、聞いてくださる方々の反応も良く、徐々にリラックスして発表することができました。行政や関係機関との連携推進、多機能型児童館との連携、世代間交流を通したふるさと教育の推進、地域の教育力の活用、地域の活性化につながる活動の様子などについて実践例を挙げながら話をさせてもらいました。近年では、保育園の生活音が騒音であると近隣住民から苦情が出ているというニュースをたびたび耳にします。実際、分科会参加者の中にも地域の理解が得られないという保育園もあるようでした。そんな中で、地域とのつながりがしっかりとあり、協力を得られたり、元気の源として歓迎されたりといった本園の実践例は、とてもうらやましいとの言葉をいただき、改めて恵まれた環境で保育ができていると実感することができました。

しかしながら、若者の定着や子どもを産み育てやすい環境づくりなど、まだまだ村と協働しながら改善していかなければならない課題も見えてきました。現在の状況に甘んじることなく、良い点を継承しつつ、村民の保育園へのニーズの把握に努め、公立としての役割を果たすことができるよう、地域との連携を継続・強化しながら、保育園経営をしていきたいと改めて感じました。

全国大会では各地の保育園の様々な取り組みを知ることができ、大変勉強になりました。また、全国各地の先生方と交流できたことも、貴重な体験となりました。出場する機会を与えていただき、ありがとうございました。

主任保育士研修会に参加して

大館市立十二所保育園
指定管理者　社会福祉法人大館感恩講
主任保育士　菊池　綾子

本研修会は、講義Ⅰでは、講師に秋田県教育庁幼保推進課、副主幹（兼）班長である北條保氏をお迎えし、「教育・保育の資の向上を図るために」という演題で、ご講演をいただき、また、講義Ⅱでは、講師に東京成徳短期大学教授である寺田清美氏をお迎えし、「保育所保育指針改定・幼保連携型認定こども園教育・保育要領のポイントについて」という演題で、ご講演をいただきました。

アメリカやイギリスでの追跡調査では、質の高い保育を受けた子どもは言語や知的発達の面で優れている、協調性が高いなどの結果が出ており、質の高い保育の重要性が客観的事実として証明されているとのことで、日本でも今年度から追跡調査が始まるそうです。０歳児からの質の高い保育が、有能な人材を育てることにつながることが分かり、国が幼児教育に対して予算を付けているという話を聞き、保育の質の向上とは努力義務ではなく、当たり前にやっていくものだと捉えることができました。

教育・保育の質とは何かを、①プロセスの質②構造（保育の条件）の質③労働環境の質の３つの側面から話が進められ、特に「プロセスの質」については、保育所保育指針等に基づいた教育・保育の実践として、平成３０年度から施行される保育所保育指針の内容とともに説明がありました。

今回の保育所保育指針の改訂のポイントは、以下の５点であると話されていました。

１、「乳児保育」「３歳未満児保育」の充実
２、「養護」の重視、養護的環境づくりの大事さの自覚
３、「幼児教育」を担う自覚と、そのための計画、評価の力
４、「子育て支援」の充実、「大きな災害への備え」
５、職場づくりと「キャリアパス」づくり

講義Ⅰ、Ⅱともに、ポイント１の「乳児・３歳未満児の保育」についての重要なこととして、『０歳児は生涯の学びの出発点』であると述べられていました。０～３歳児までの子どもは、保育士等がどう関わりを持つかにより、その後の成長に大きな影響を与えるため、温かく、受容的に、応答的に関わることが大切で、また、０歳児でも「幼児期の終わりまでに育ってほしい１０の姿」を想定した保育をすること、今やっている保育は、どんな経験に結びついているのかを意識してほしいと、何度も何度も言われていました。「幼児期の終わりまでに育ってほしい１０の姿」の文言は、小学校教育要領にも記されていることも話され、幼小の連携の大切さや０歳児からの継続された保育の重要性を改めて感じることができました。

保育士等の責任により、保育の質も変わってくるため、保育所保育指針を基に、意見交換をしたり、キャリアアップ研修に参加したり保育アドバイザーに協力を求めたりしながら、それぞれの得意分野を活かし互いに補い合い・高め合いのできる職員間の関係性を築いていけるよう努力していきたいと思います。

県保協ブロックセミナー　保育所保健・衛生研修会に参加して

川西保育所
保育士　佐藤　直子

本研修は、講師に緑園こどもクリニック院長　山中龍宏氏をお迎えし、秋田県生涯学習センターを会場に「保育管理下の傷害予防に取り組む」という演題でご講演いただきました。１５１名という会場いっぱいの参加に皆さんの本研修に対する関心が伺えました。

山中先生は、小児科医ではありますが、１９８５年９月、プールの排水口に吸い込まれた中学２年女児を看取ったことが事故予防の取り組みの始まりでした。事故予防は、一人でできるものではなく、いろいろな領域の人たちが関わり一緒になって行いできるものだと話されました。今は、NPO 法人 Safe Kids Japan の理事長も務められ、様々な機関と連携して傷害予防に努めています。

「傷害予防」とはなかなか聞き慣れない言葉でした。子どもの事故の捉え方として、以前は「事故」…予測できない避けられない事象と考えられていましたが、最近では「傷害」…予測でき予防可能な事象として考えられるようになってきております。

予防とは、傷害が起こった状況について、「変えたいもの」～制御したいもの～、「変えられないもの」～制御不可能～、「変えられるもの」～制御可能～の３つに分け、変えられるものを見つけ、変えられるものを変えることである。そこで「上流へ行ってみよう」というアニメーションを見て、状況を当てはめて検証をしてみました。物語は、川の上流から流されてくる人を助け出しても、また次から次へと人が流されてくることに、１人の女性が『どうして？』と疑問を抱き、上流を見に行きます。すると、橋には穴が開いていることが分かりました。「変えられるもの：穴の開いた橋」「変えるもの：穴を塞ぐ」ということが理解できました。しっかり原因を確かめて未然の予防をするということが大事であると痛感しました。

また保育管理下では、医療機関の受診が必要な傷害の発生率は約２％であり、保育の場で危険性が高い時間帯は、「食う」、「寝る」、「水遊び」の３つの場面である、どうして傷害が起きるのか、それは子どもたちが日々、発達しているから。３場面については、具体的に予防策について、事故が起きてからの検証というのは非常に難しいので、この時間帯だけでも動画で記録していることが望ましいとの助言を頂きました。

午後からは演習もあり、６人ずつのグループに分かれ、各園で今までにあった傷害やその予防について等話し合いました。どのグループも活発な話し合いが進められていました。また、山中先生からも具体的なアドバイスをいただき、有意義な時間となりました。

まさか自分の園で…という考え方ではなく、ひょっとしたら自分の園でもと思うこと、自分の意識を変えることから始めていきたいと思います。安全な製品や環境を作れば、子どもたちは制限を受けることなく活動的になり、活動的になればより健康になれるという言葉が印象的でした。子どもも保護者も、そして保育者も安全な環境で安心して子育て、保育ができるように、今自分たちにできる予防、役割を考え、日々の保育に努めていきたいです。

ホルモンの美味しい
鹿角地区より

おらほのうんちく（地区）研修会

「食育研修会について」～共に学び合う仲間たちと～

鹿角地区保育協議会保育士部会
会長　阿部　由美子

鹿角地区は､保育協議会保育士部会共催､主催の研修を年間５回開催しています。今年度は、運動実技、食育、調理実習、特別支援教育（映画）等を行ってきました。その中の食育研修について伝えたいと思います。

８月 29 日 18：00～20：00　鹿角広域交流センターにて
講師：岩倉政城先生
演題「口から見えてくるこころの旅路
～飲み込まない、指しゃぶり、噛みつきの背景～」

なんてわくわくする演題でしょう。私はこころの旅路に思いを馳せ当日を待ち焦がれました。そもそも岩倉先生との出会いは、著書「“ボクってすごい”、“アタシってすごい”と思える子を育てる：自己肯定感確立への道すじ」の本でした。ユニセフが公表した子どもの「幸福度」に関する報告書で「孤独」だと感じている子どもの割合が最も高かったのは日本だと聞きました。自信がないの？思春期？と思いながらこの本に出会い、少なからず私達に出来ることがあるのではないかと思いました。自己肯定感は、他者からの言葉によって育まれます。人が人を認めること、ありのままを受けとめること、そんな保育がいいなぁと本を読んで感じました。そうだ！先生に会いたい、話を聴きたい。みんなで聴きたい。ホームページから連絡をとってみると繋がったんです。先生と。快く引き受けて頂きました。

先生は尚絅学院大学名誉教授、歯学博士、新日本医師協会会長であり、前年３月には８年間務められた尚絅学院大学附属幼稚園園長を退職されました。幼稚園ホームページに掲載された“えんちょうぴっぴ”そのままで私たちの目の前に現れ、２時間、全身全霊で思いを語ってくれました。

講演会にありがちなトップダウンではないイスの並べ方をして欲しいと先生からの依頼がありました。半円を描くように並べたイスの間を奥へと進み、時には参加者と寝そべり、実際に寄り添うことを実演。胎児の気持ちや子どもの気持ちになって代弁し、むなしい言葉より言葉じゃない保育の重要性を語り、子どもたちが幸せになって欲しいという先生の思いが、愛が、私たちに伝わってきました。
子どもを深く理解すること、理論と保育が繋がり、明日からの保育・教育に力をもらえました。当日参加した 169 名と共に学びあえたことがとても嬉しかったです。そして、岩倉先生と出会えたことに感謝し、「保育の仲間たちによろしく伝えて下さい」との先生の言葉に、鹿角で一緒に保育・教育する仲間たちや企画運営をした仲間たちに感謝した一日でした。

編集後記

2017 年も残りあとわずかとなりました。今年も早いもので年末のご挨拶をさせて頂く時期となりました。皆さまにおかれましてはますますご清栄のこととお慶び申し上げます。

本年より広報委員のメンバーとして参加させて頂き、諸先生方にご指導頂きながら、皆さまに手にとってもらえる瓦版、保育あきたを目指し、日々奮闘する毎日です。今回の発行にあたり、年末のお忙しい中、原稿を寄せて頂いた先生方、本当にありがとうございました。お気づきのことがありましたらぜひ、お知らせ下さい。よろしくお願いいたします。

時節柄、ご多忙のことと存じます。くれぐれもお体などお崩しになられぬよう、お気を付けください。また良い新年をお迎え下さい。　　（広報副委員長　加賀屋寛子）

広報委員名

担当副会長	田中　真由美（毛馬内保育園）	
委員長	大坂　江利子（八森こども園）	
副委員長	加賀屋　寛子（かわしり保育園）	
委員	阿部　明子（大湯保育園）	斎藤　玲子（綴子保育園）
	宮腰　真澄（船川保育園）	石田　義成（白百合保育園）
	福井　洋子（岩見三内保育所）	藤原　真智子（下川大内保育園）
	戸嶋　富美子（おおたわんぱくランド）	
	石田　幸子（三重保育所）	佐藤　浩子（にしもないこども園）